

「恐竜」以前の絶滅動物を読むロマン主義のレトリック

中村仁紀

文学史的にはロマン主義時代後期にあたる 1810–30 年代は、英国における古生物学の黎明期でもある。1814 年に Royal Society の *Philosophical Transactions* でイクチオサウルスの頭部化石が初めて記載されたのを皮切りに、1810–20 年代には、ジュラ紀・白亜紀層が広がるイングランド南部・南東部で大型絶滅爬虫類の化石の発掘が相次ぎ、ロンドン地質学会を中心にその成果が報告され続けた。1841 年の英国科学振興協会の大会で新しい分類学用語として *Dinosauria* (恐竜目) が提唱されるまで、これら大型爬虫類は、限られた化石標本に基づき比較解剖学的方法で現生種と照合されつつ、分類学上の位置付けが定まらないまま、文化的・神話的な巨大生物のイメージと結びついて理解されていた。W. J. T. Mitchell が *The Last Dinosaur Book* (1998) で述べるように、恐竜表象は科学的知見が参照されつつ、事実とフィクションが織り交ぜられてできたものであるが (29; 50)、「恐竜」以前の絶滅動物の場合、とりわけ参照されるべき事実そのものが想像や推測によって補われる度合いが大きかった。

本発表では、19 世紀初頭に発掘された大型絶滅爬虫類が、科学的記述と文学的叙述の交錯の中で、どのように言語的に可視化されていったかを考察した。それらが生きていた古代世界の光景が絵画で表現されるのは、Henry De la Beche の *Duria Antiquior* (1830) 以降である。しかし、1820 年代半ばには学会報告や論説の中で、解剖学的記述や分類学的考察とともに、新たに発見された個体の姿形や習性・動作、さらにはそれが生きていた環境まで想像的に描き出すような叙述も用いられていた。本発表では、とりわけ 1820 年代後半以降、経験科学的記述の規範の内部で、読者の想像力に訴え、絶滅動物に対する視覚的理解を促す修辞が用いられ始め、またそれが 19 世紀半ば以降の古生物の視覚表象文化に対して認識論的な枠組みを準備したことを論じた。

まず、重要な背景として、Georges Cuvier の *Recherches sur les ossements fossiles de quadrupèdes* の序文 (“Discours préliminaire”) が 1813 年に英訳出版され、キュヴィエの古生物復元法が英国地質学者らにも大きな影響を及ぼしたことがある。キュヴィエは、骨格の各部位が生存の目的に合うよう相互に関連しているという「関連の原理」に基づき、大量の化石標本を使って比較解剖学的方法を行うことで個体を既知の分類体系上に位置付け、そこから骨格全体を復元しようとした。キュヴィエ自身はそれを正当な帰納的方法と捉えていたが、一本の骨からその動物の全体を復元する彼の発想は、Gideon Mantell が「寓話上の魔術師の杖の如く」と形容したように (Mantell [1833] 332)、英国の地質学者たちの間で、断片・残骸から失われた全体を再生させ、太古の生物や世界を現出させる (ロマン主義的な文脈における) 創造的な資質として緩やかに解釈・受容されていった。

ロンドン地質学会は 1807 年の発足当初より、データの収集・蓄積・分析に基づく経験科学的方法を重視し、断片的な証拠から無闇に推測や想像を広げることは慎重であったが、新種の絶滅爬虫類の報告が増える 1820 年代半ば頃から、キュヴィエ的方法を拡大解釈し、個体の姿形を想像的に描く記述が増えていく。William Daniel Conybeare は、1822 年のイクチオサウルス 4 種に関する報告においては、キュヴィエの方法がもたらす「美しい類比」を評価しつつも、それによって記述や分類が「拙速な帰納」に陥ってしまうことに警戒を示していた (Conybeare [1822] 104)。しかし 1824 年のプレシオサウルスの新種報告では、発掘された全身骨格に基づいて、カメに似た楯状の四肢を持ち、白鳥のように長い首を反らせつつ、獲物を狙ってその首を俊敏に動かす習性など、プレシオサウルスの生前の姿をかなり自由に描き出している (Conybeare [1824] 381; 388–89)。この傾向は、William Buckland の 1829 年のプテロダクティルスの新種報告でさらに顕著になる。バックランドは、キュヴィエを参照しながら、コウモリ、ヤマシギ、ワニ、トカゲなど複数の動物の特徴を合成してプテロダクティルスの怪物的な姿を説明し、その全体像はロマンスや紋章に描かれるドラゴン以外に比すべきものがないと述べる。さらに、長い鉤爪を備えた三本指から、這う、木をよじ登る、ぶら下がる、といった動きを想像し、その姿を *Paradise Lost* 第 2 巻のサタンに重ねる (Buckland [1829] 217–19)。バックランドは、プテロダクティルスのこの「見かけ上不整合な特徴の組み合わせ」をうまく調停しえたのは、キュヴィエの天賦の才によるものだったと述べる (Buckland [1836] 1: 221–22) が、以降の地質学者たちの文献においても、比較解剖学的方法の復元の説明は、既知動物の特徴を組み合わせて未知の生物を可視化する「キメラの合成」の修辞で行われることが頻繁にあった。

上記のバックランドのプテロダクティルス報告が重要なのは、その怪物的様相の描写だけでなく、それがかつて生息していた世界そのものを立ち上がらせている点にある (「空には同種の生物が群れ、海にはそれに劣らぬ怪物的なイクチオサウルスやプレシオサウルスが満ち、太古の湖や河川の岸边には巨大なワニやカメが這っていた」 Buckland [1829] 218)。キュヴィエの復元の対象を生態環境へと拡張させるこのような試みも、1820 年代末以降の地質学文献で増えていくが、その際にしばしば読者にその情景を想像的に「目撃」させる叙述が用いられて

いた。マンテルは、絶滅動物を描こうとすればその記述は「確立された事実からの正当な推論」よりも「ロマンス」に近づくとして断りながら、読者に対してその巨大さゆえに「比較できる適切な対象がない」生物たちを「想像せよ」「目撃せよ」と語りかけ、プレシオサウルスにも翼があればドラゴンのように見えたであろうと空想しながら、様々な絶滅爬虫類が群れる世界へと誘っている (Mantell [1827] 83)。R. O'Connor は、こうした「古代生態系のパノラマ的情景」が地質学の記載に含まれるようになった事態を、想像力や空想を不健全なものとみなしていた地質学会の公式の修辭が反転したものと説明しているが (337)、記述から叙述へのこうした質的転換は、キュヴィエ的方法からの逸脱というより、その延長として理解すべきであろう。 *Wonders of Geology* (1838) でマンテルは、比較解剖学的検証を行った後、「これらの帰納的推論の結果をより印象的な形で具体化しよう」と述べ、絶滅動物たちの世界を、時間旅行者の視点で眺望する形で描き出す (Mantell [1838] 1: 373-76)。また、化石標本から推定されるイグアノドンの異様な巨大さについて、「フランケンシュタインの如く、私は自分の調査によって生み出した巨大な怪物に啞然とした」とも述べる (Mantell [1833] 315)。こうしたマンテルの発言が示唆しているのは、キュヴィエ的な手続きそのものが、失われた世界を再創造し、かつ驚嘆しつつそれを目撃する経験を読者に共有させる叙述形式と結びつくことで、科学的知としての説得力を獲得しているということである。

こうした叙述は、ロマン主義後期、とりわけ George Gordon Byron による人類以前の世界の描写と構造的に共振関係にある。バイロンは *Cain* (1821) の序文で、地球上の生物が何度も絶滅を繰り返したというキュヴィエの学説を作品世界のモチーフにしたと明言し、カインがルシファーに導かれて太古の絶滅動物の世界を目撃し、「死すべきものの本性の虚無」を知る状況を描いている (Act 2, Scene 1, 417-24)。この「導き」と「目撃」の形式は、マンテルが示したような、同時代の地質学的叙述と同じ構造を有しており、実際、バイロンの後期作品は 19 世紀半ばの地質学書でも頻繁に引用されていることを踏まえると、キュヴィエ的復元は、バイロンの詩的想像力を媒介にしながら、地質学的記述にあらためて具体的なイメージを与えていったと言えるだろう。

文学的な修辭や叙述が古代世界を視覚化するのに重要な役割を果たしたとすれば、*Duria Antiquior* (1830)以降の古生物画がその役割をある程度引き継いでいくことになる。ただし、科学的記述内の情景描写と絵画メディアによる視覚表象を同質のものと捉えるには留保が必要である。当初の地質学言説においては、情景の想像は、あくまでもキュヴィエ的復元の拡張的適用によるものであるという認識があった。バックランドは自身の著書に骨格図版を多数収録した一方、想像に基づく生体復元図はむしろ科学的信用を落とすものとして避けており (Rudwick 68)、また、*Duria Antiquior* でも、描かれた大型爬虫類は当時の地質学報告における属・種の記載にある程度忠実であり、視覚表象が科学的記述を超えるという発想はさほど強くはなかったと考えられる。それに対して、1830 年代以降に登場する John Martin や George Scharf らの古生物画では、時にどの生物か判別が困難なほど、より自由な表現が試みられており、「散文的な証拠による制約をほとんど受けず、牧歌や悪夢、あるいは両者の中間のものとして表現されることが可能になった」 (Rudwick 81) とされる。マンテルが、イグアノドンの世界について、「言語ではかろうじて描けるに過ぎないが、地質学研究の助けを借りたマーティンの魔法の絵筆がそれを太古の時代の忘却から救った」 (Mantell [1838] 1: 369) と述べる時、絵画は科学的成果の単なる補足・注釈ではなく、言語以上に絶滅動物の世界を現出させる媒体として重要な価値を持つものとなる。

英国古生物学の黎明期において、絶滅爬虫類に対する理解は、その世界を目撃・体験させるような文学的な叙述と結びつきながら、記述の規範を徐々に越え出るような視覚的想像を伴うものへと展開していった。それは科学的知の伝達形式の質的変化であったと同時に 19 世紀半ば以降の古生物の表象文化の枠組みを準備するものでもあった。地質学文献内部に見られる記述から叙述へという微妙な重心移動は、そうした絶滅動物の視覚表象の前提がいかんにして形成されていったのかを考える上で重要な一つの視座を提供する。

Buckland, William. *Geology and Mineralogy Considered with Reference to Natural Theology*. 2 vols., William Pickering, 1836.

———. “On the Discovery of a New Species of Pterodactyle in the Lias at Lyme Regis.” *Transactions of the Geological Society of London* (hereafter *T of GSL*), s. 2, v. 3, 1829, pp. 217-22.

Conybeare, W. D. “Additional Notices on the Fossil Genera Ichthyosaurus and Plesiosaurus.” *T of GSL*, s. 1, v. 1, 1822, pp. 103-23.

———. “On the Discovery of An Almost Perfect Skeleton of the Plesiosaurus.” *T of GSL*, s. 2, v. 1, 1824, pp. 381-89.

Mantell, Gideon. *The Geology of the South-East of England*. Longman, et al., 1833.

———. *Illustrations of the Geology of Sussex*. Lupton Relfe, 1827.

———. *The Wonders of Geology*. 2 vols. Relfe and Fletcher, 1838.

O'Connor, Ralph. “Facts and Fancies: The Geological Society of London and the Wider Public, 1807-37.” *Geological Society, London, Special Publications*, vol. 317, 2009, pp. 331-40.

Rudwick, M. J. S. *Scenes from Deep Time: Early Pictorial Representations of the Prehistoric World*. U of Chicago P, 1992.